

プッチーニ：オペラ『蝶々夫人』より 愛の二重唱

ジャコモ・プッチーニ(1858～1924)はイタリア出身の作曲家で、数多くの名作オペラを書き残しました。「メロディー・メーカー」だったプッチーニの旋律は、非常に魅力的で耳に残りやすいものが多く、普段あまりクラシック音楽を聴かない方でもきっとどこかで聴いたことのある歌があるでしょう。歌手の力量を存分に引き出す歌の旋律に加えて、色彩豊かで緻密に書かれたオーケストラが全体の流れを支えていることも、プッチーニのオペラの特徴です。また、歴史上の人物や貴族が登場するオペラが多かったなか、身近な物語を題材とし、等身大の人間の感情を表現しているところもその人気の一因でしょう。

『蝶々夫人』は長崎を舞台としたオペラです。プッチーニがこのオペラを作曲した20世紀初頭は、ヨーロッパで「ジャポニズム(日本趣味)」が流行っていた時代。エキゾチックな文化は、西洋人に新たな刺激を与えていました。そうしたなか、プッチーニは日本を訪れたことはなかったものの、イタリア駐在の公使夫人に協力を仰いで箏や邦楽の旋律について教わり、日本的な要素を取り込もうとしました。実際、『蝶々夫人』には日本の旋律が使われている場面があります。初演は1904年2月17日、ミラノ・スカラ座にて。この日は、今日の人気とは裏腹に、大失敗だったといえます。そこでプッチーニは改訂の手を加え、ようやく成功を手に入れました。

ときは明治時代。まだ15歳の芸者である蝶々さんは長崎を訪れたアメリカ海軍士官ピンカートンと結婚、ピンカートンがアメリカに帰国すると、夫の帰りを息子とともに一途に待ち続けます。しかし3年後、長崎に帰ってきた彼はアメリカ人の妻ケートと一緒にだったのです。そして子どもを手放すよう言われた蝶々さんは、武士だった父の形見の短剣で自害する、という悲劇です。

「愛の二重唱」は第1幕の最後に、瞬く星空のもと蝶々夫人とピンカートンがお互いの愛を確かめる場面の二重唱です。本気の蝶々さんに対してはじめは軽い気持ちのピンカートンですが、二人の燃え上がってゆく愛が情熱的に表現されます。

プッチーニ：オペラ『ラ・ボエーム』より

「冷たい手を」、「私の名はミミ」、「愛らしい乙女よ」

『ラ・ボエーム』は、1894～95年に作曲されたプッチーニの4作目のオペラです。1896年にトリノのレージョ劇場で初演され、上演を重ねるごとに人気が高まっていきました。

舞台は19世紀のパリ。貧しい詩人ロドルフォと病弱なお針子ミミは恋に落ちます。ミミの病が悪化し、二人は一度別れるものの再会。しかしミミはロドルフォに見守られながら静かに息を引き取ります。若者たちの友情や芸術への情熱が描かれるこのオペラには、プッチーニ自身の貧しかった青春時代の体験が反映されていると言われます。

「冷たい手を」は、ロドルフォが自室でミミと出会った直後に歌われるアリアです。ろうそくの火を借りに來たものの倒れてしまったミミを助けるロドルフォ、そのとき彼女の手の冷たさに心を痛めながら、自分の夢、そして彼女への淡い恋心を優しく歌い上げます。ロドルフォが自分のことを語ったあと、彼はミミに何者なのかを問います。求めに応じて、ミミは「私の名はミミ」と自分の名前や生活について吐露。彼女の純粋さや夢見心地な性格が、語るようなリズムの旋律で歌われます。そして二人の二重唱「愛らしい乙女よ」へと続きます。ここでは二人の心が通じ合い、恋が始まる瞬間が美しく歌われます。はじめはロドルフォとミミが交互に歌い、徐々に二つの声が重なり合い、最後は高音での「愛！ Amor」でクライマックスを迎えます。

プッチーニ：オペラ『トゥーランドット』より「ご主人様、お聞きください」

『トゥーランドット』はプッチーニの最後のオペラです。彼は最晩年の4年間でこのオペラの作曲に費やしましたが、最後まで完成させられないまま、1924年、65歳で生涯を閉じました(そのため最後の場面は、弟子のアルファードが補筆しています)。

王女トゥーランドットの物語は、古代中国を舞台とした有名な題材で、このプッチーニのオペラ以外にもさまざまな演劇やオペラがあります。求婚者に3つの謎を出し、答えられなければ処刑する、という冷酷な王女トゥーランドット。謎の王子カラフはその試練に立ち向かいます。彼は見事に謎を解くものの、トゥーランドットの心を得るため、自らの名前を明かす賭けにでます。彼の正体を知る女奴隷のリューは、愛と忠誠のもと命を絶ち、トゥーランドットは愛に目覚め、カラフの名を「愛」と答えて二人は結ばれます。

「ご主人様、お聞きください」は、トゥーランドットに魅せられたカラフが謎解きに挑もうとするとき、ひそかに彼のことを慕っていたリューが「行かないでください」と懇願するアリア。悲しみに打ちひしがれたリューの女心を伝える旋律、さらに重厚なオーケストラが感情を盛り立てます。

プッチーニ：オペラ『トゥーランドット』より「誰も寝てはならぬ」

「誰も寝てはならぬ」は第3幕でカラフが歌うアリアです。トゥーランドットが彼の名前を突き止めようと「誰も寝てはならぬ」と命じ、その言葉を使者たちが告げて街を歩くなか、カラフは自信に満ちて高らかに愛と勝利を歌います。最後の「私は勝つ！」に向けて、音楽はクレッシェンドしていき、またオーケストラも弦楽器のみから管楽器も含めた輝かしい響きへと変化し、壮大なクライマックスを築きます。

ドヴォルザーク：交響曲第9番 ホ短調 Op.95「新世界より」

アントニン・ドヴォルザーク(1841～1904)は、チェコの「国民楽派」の作曲家として知られ、チェコ音楽の発展に大きく貢献した作曲家です。しかし生涯すべてを故郷で過ごしたわけではありませんでした。1892年、彼はニューヨークのナショナル音楽院から招聘され、家族とともにプラハを出発し渡米します。

好奇心旺盛なドヴォルザークにとって、「新世界」であるアメリカは刺激に溢れていたようです。彼はとりわけ現地の音楽に興味を示し、黒人の学生に黒人霊歌を歌ってもらったり、音楽評論家にアメリカ先住民の旋律集を依頼したりと、アメリカらしい音楽を探索しました。そして、5音音階やリズムの反復、シンコペーションのリズムといったアメリカの音楽の伝統的な要素を用いて、独自のスタイルを確立すべく作曲を続けました(もっとも、5音音階など、アメリカの音楽にはチェコの音楽と共通する特徴もあったのですが)。

この交響曲は、1893年12月16日にニューヨーク・フィルハーモニーによって初演されました。序奏付きの第1楽章は、ソナタ形式で大規模に展開されます。途中のフルートの旋律が黒人霊歌からの影響ではないか、と指摘されることもあります。第2楽章は、ドヴォルザーク自身、先住民の英雄を謳った叙事詩「ハイアワサの歌」にインスピレーションを得たと述べています。このイングリッシュ・ホルンで示される主要旋律はとりわけ親しみやすく、日本では『家路』としても歌われてきたものです。第3楽章は、リズムの掛け合いで進むスケルツォ。そして第4楽章は、力強い主要主題から勇壮に展開されます。この交響曲は、こうした「アメリカ的」要素が盛り込まれているばかりでなく、各楽章の主題が関連しているなど、ドヴォルザークの交響曲作曲家としての高い技術も発揮された作品です。